



ご入学・進級おめでとうございます。春休みが終わり、教室には子供たちの元気な声が戻ってきました。友達と春休みの思い出について話すなど活気にあふれ、一人一人の充実した春休みの様子が伺えます。

さて、令和4年度に引き続き、今年度も特別支援教育だより『Ciao!!』を発行することにしました。発行者である渡邊（特別支援コーディネーター・そよかぜ学級担任）は、数年前までイタリア共和国に3年間住んでいました。イタリアの人は老若男女、障がいがあっても、知らない人ともみんな『チャオ!!』と言うだけで、初対面でも昔からの友達のように会話を乐みます。妊婦さんやベビーカーをおすママにも小さい子供にもみんなやさしく、インクルーシブが浸透している国と感じました。そんなイタリア語の挨拶である『Ciao = チャオ!!』をタイトルに据えました。不定期の発行ですが、学校から御案内したいことや宇都宮市からお知らせがあった時などに発行したいと思います。



今回のお便りはNo.4です。昨年度1年間の特別支援教育だよりNo.1～3 は昭和小学HPに掲載されております。お手すきの時にお目通しいただけますと嬉しいです。↑QRコードはこちら



ゴーリテキハイリョってなあに？

ゴーリテキハイリョとは何でしょうか。学校教育を推進する上で欠かせないのが「合理的配慮」なのです。

合理的配慮には、「学習内容の変更・調整」、「情報・コミュニケーション及び教材の配慮」、「校内環境のバリアフリー化」など11の観点があります。（詳しくは、国立特別支援教育総合研究所が開設しているホームページ「インクルDB（インクルーシブ教育システム構築支援データベース）」をご参照ください。



板書をノートに鉛筆で写すことがどうしても苦手な子がいます。その子には合理的配慮としてタブレットパソコンでの板書の打ち込みをOKにする。このようなことも、合理的配慮のひとつです。

もしかしたら、「ずるーい！」という子もいるかもしれません。でも、これは、みんなと一緒に学ぶためのちょっとした配慮なのです。

合理的配慮は「公平」の考え方を基盤に提供されるものです。学校においては、大きく分けて

- ① 学習面・生活面で、みんなと同じスタートに立てるための配慮

- ② 目指すゴールの設定やゴールに至る手段における配慮の二つがあります。

その子に合わせた特別な配慮である合理的配慮は決して特別扱いをすることではありません。

子供たちには、それぞれの特性に合った学び方をする権利があるからです。もし、お子さんの学習状況や発達、感情のコントロールなどに、おうちの方がなんらかの違和感を覚え、『うちの子もちゃんとできたらいいのにな。環境さえ整ったらできる子なのに。ちょっと工夫があれば……。』そう思ったら！それはチャンスです。



保護者はだれよりも一番に、お子さんの幸せを考えます。特定の学習が困難、一斉指導が通りにくい、集団行動がとりづらい、情緒が不安定、不登校傾向、その子なりの困り感に合わせた工夫のもとで、その子なりの取組ができ、お子さんが幸せに安心して学校生活を送ることができる、そんな取組のあれこれを、少しずつお伝えしていけたらと思っています。

本市・本校の特別支援教育

(特別支援教育豆だより 参照)

	特別支援学級 (H22年度開設)	特別支援教室 (H20年度開設)
在籍	特別支援学級の在籍	通常の学級の在籍
担当者	特別支援学級担任(教員)	かがやきルーム指導員(非常勤嘱託員)
愛称	そよかぜ学級(本校独自の名称)	かがやきルーム(宇都宮市統一の名称) →特別支援学級との混乱を避けるため
正式名称	特別支援学級	特別支援教室
教育課程	○ 特別な教育課程 → 児童の教育的ニーズによって決定	1週間に5時間以内 ○通常の教育課程 (校内支援委員会を開催し検討する)
利用の手続き	入級の決定については校内教育支援委員会の他、原則として教育センターにおける就学相談を経て入級する。保護者の同意が必要。	校内支援委員会(校長・副校長・教務・学年主任・担任・養護教諭・かがやきルーム指導員・SCM・特別支援コーディネーター等が参加する会議)を開き、対象者の困り感を共有し、かがやきルームでの指導内容、指導時数等について決定する。保護者の同意が必要。

○特別支援学校・・・宇都宮市においては国立・県立の7つの学校があります。

- ・視覚障がい(盲学校) ・聴覚障がい(聾学校)
- ・知的障がい(富屋・宇大附属特別支援学校)
- ・肢体不自由(のざわ・わかき特別支援学校)
- ・病弱(岡本特別支援学校)

○特別支援学級

本市には、

- ・難聴 ・知的障がい
- ・肢体不自由 ・自閉症・情緒障がい

4種類の学級があります。

言葉の力の影響力の大きさ

筆者の私は子どもの頃に育った環境から、ほんのちょっとした方言が気づかずに出てしまうことがあります。

かつて担任していたクラスに、とてもおだやかで真っすぐな歴史が得意なお子さんがありました。その子は自閉症と診断を受けていました。清掃の時間にそのお子さんに、クラスのごみをゴミステーションに入れてきてもらえるように頼みました。すると、教室にいつまで経っても帰って来ないのです。心配になり迎えに行くと、その子はボックスの前で静かに泣いていました。

「どうしたの？帰って来ないから心配したよ。」

「渡邊先生、ごみは…ぼくは…投げられません。」

私は、はっ！としました。きっと、私の言葉のせいだと。ごみ捨てを頼む時に、「ごみ、投げてきてくれる？」と言ったのでした。ごみを捨てることを「ごみを投げる」という地域があります。私の方言は北海道・東北地方によくあるようです。自分の当たり前が当たり前ではないと感じるとともに、言葉をそのまま真っすぐに素直に受け取るお子さんもいることを知りました。当時はまだ特別支援学級の担任ではありませんでしたが、ひとりひとりのお子さんの特性をよく見極め、大人として言葉には気を付けなければならないと学ばせていただきました。みなさまも同じような経験はございませんか。

「学校と家庭がいっしょに」を合言葉に、よりよく連携していけたらと思います。保護者の皆様と学校がよりよい関係で学び合うことにより、信頼関係が築かれていきます。子育てのパートナーとして、お子様の将来を共に支えていけるようお互いの立場を理解し合い、お子様のためによい方法を一緒に考えてまいります。

発行者：特別支援コーディネーター・SCM・そよかぜ学級担任 渡邊 由香里